

山のうえで友だちと遊んでいる時、かすかに響く低い音を聞いた。みなが走っていた足をぴたりと止めて顔を見合わせ、首をかしげて、また走り始める。ある友だちの背中に負ぶわれた赤ん坊が、高い声で泣き出した。僕たちは、泣くな、泣くな、と声をかけて笑った。

夕方家に帰ると母親が、先ほどの音は海辺の軍艦から放たれた大砲の音だ、と告げた。

海かあ、と思う。海のことを考えるのは、なんだか久しぶりだ、と思う。

ここから海までは、歩いて半日かかる。まだ夜も明けない時刻に、母親と兄と家を出て、海に行くことがあった。昼前まで貝を採ると、背中のカゴがいっぱいになる。

そのあと兄と浜で遊んで、夕飯までには家に帰って、その貝が食卓に並ぶのが楽しみだった。

この頃は誰よりも早く歩けるから、今ならもつと近いのかもしれない。

戦争が激しくなってきたからは、海には行っていない。

強い日差しの中、青い海に上がる赤い火を想像する。脇腹に、汗が流れる。

兄は二年前に志願して、兵隊に行った。「いつかどうせとられるんだから、

先に行った方が得だがすべ」。馬を育てるのが得意な兄は、偉いさんの馬の世話係になったために、戦地には出ずにいるという。

「芸は身を助くのっさ」。祖父は竹を編む手を止めずにそう呟いたが、横で作業をしていた父は何も言わなかった。

それから数日後、家に帰ると、母親から、戦争が終わったという報せを聞いた。

兄が帰って来るのがうれしくて、僕は廊下を走り回った。ひと月ほど経ったある日、兄は家に帰ってきた。

立派な軍服を来て、ものがたくさん詰まったリュックサックを背負っていた。

いくつもの船を乗り継いで、やっとここまで帰って来たという。

たくさんのましが壊れていて、動かない船があちこちに浮かんでいて、たという。

海にもいろいろな色があるのだという。

大事に世話をした馬との別れは、せつないものだったという。

兄はあまり表情を変えずに、一息にそれだけのことを話した。

兄は僕の顔を見ると、黄色い実のようなものを差し出して微笑んだ。

それは、バナナというらしい。家族全員で分けると、小指の先ほどになる。

頬の中いっぱい広がるねっとりとした甘みは、海の手、どこかもつと遠くを思わせる気がした。

それからしばらくのあいだ、兄は父の畑を手伝っていたが、ある日、

漁師になるというメモ書きを残して居なくなってしまった。

海に何かを落として来たのだろうか、と、僕は思った。

それはどうしても探さなくてはならないものだ、ということが、僕には分かる気がした。

青い海に浮かぶ、いくつもの黄色いバナナを思い浮かべる。

それをひとつ残らず拾おうとする兄の姿がそこにある。

僕は、そのバナナのひとつを剥いて、口に入れてみる。

甘みよりもずっと濃い塩味に、むせ返るようだった。